

主な田端 文芸家たち



田端文芸家たち

か行



鹿兒島 寿蔵(かごしま・じゅぞう)

明治31年(1898)～昭和57年(1982) 紙型人形作家・歌人
福岡県出身。大正7年、田端350(現1-15)番地に入居し、同9年、349(現1-15)番地、昭和2年、380(現1-27)番地、同7年、46(現4-5)番地と居住。紙型人形制作で人間国宝に認定される。また、歌人・島木赤彦に師事し、アララギ派歌人として歌壇でも活躍。アララギ選者、機関誌編纂などに携わる。



鹿島 龍蔵(かじま・たつぞう)

明治13年(1880)～昭和29年(1954) 実業家
東京都江東区出身。明治45年、田端650(現6-6)番地に入居。鹿島組(現鹿島建設)取締役。書、篆刻、謡、舞、長門、狂言、テニス、スケートなど多趣味で、田端の人々との交わりは深い。「春陽会」や「道開会」などに参加し、田端文芸家のスポンサー的存在となった。雅号・唐升。

片山 潜(かたやま・せん)

安政6年(1859)～昭和8年(1933) 社会運動家
岡山県出身。明治41年、田端613(現4-19)番地に入居。25歳で渡米、苦学してエール大学を卒業。帰国後、キリスト教的社会改良運動を興す。幸徳秋水らと社会主義研究会を設立。大逆事件、ロシア革命の影響による弾圧を逃れて日本を脱出し、ロシアに潜入、同地で客死。



香取 秀真(かとり・ほつま)

明治7年(1874)～昭和29年(1954) 鑄金家・歌人
千葉県出身。明治42年、田端433(現1-20)番地に入居。大正6年、438(現1-20)番地に転居(芥川龍之介の隣家)。帝室技芸員、帝国芸術院会員など務めた鑄金界の第一人者。明治41年、東京鑄金会を設立。昭和28年、文化勲章受章。古代金工史の研究にも業績をあげる。正岡子規門下で根岸短歌会にも参加した歌人として知られ、歌集も刊行。滝野川町議会議員も務めた。



香取 正彦(かとり・まさひこ)

明治32年(1899)～昭和63年(1988) 鑄金家
東京都文京区出身。香取秀真の長男として誕生。昭和6年、秀真宅から独立し、田端500(現2-10)番地に転居。帝展、日展などで活躍。昭和28年、日本芸術院賞受賞。昭和42年、広島平和の鐘を制作・寄進。「平和余韻の鐘」と銘うった梵鐘づくりに生涯をささげ、全国各地に150を超える名鐘を残す。人間国宝に認定。



川口 松太郎(かわぐち・まつたろう)

明治32年(1899)～昭和60年(1985) 小説家・劇作家
東京都台東区出身。昭和2年頃、田端476(現5-2)番地(岩田専太郎の隣家)に入居。大正4年、久保田万太郎に師事。関東大震災後、大阪に移り直木三十五らと雑誌『音楽』を編集。劇団主宰、映画会社重役も務める。直木賞、菊池寛賞、吉川英治文学賞、文化功労賞などを受賞。



菊池 寛(きくち・かん)

明治21年(1888)～昭和23年(1948) 小説家・劇作家
香川県出身。大正12年、田端523(現5-5)番地(空生屋星転出の空家)に入居。芥川龍之介らと第三・四次『新思潮』を創刊。「藤十郎の恋」「父帰る」などの戯曲も発表し文壇に清新な風を送る。文芸春秋社を起し、芥川賞や直木賞創設による後進の育成など、文化活動にも幅広い功績を残す。

北原 大輔(きたはら・だいすけ)

明治22年(1889)～昭和26年(1951) 美術評論家・画家
長野県出身。明治40年頃、田端335(現1-19)番地に入居、終生の地とする。板谷波山に魅せられ画筆を捨てて陶芸の道に進み、東京帝室博物館の陶磁器主任となる。陶磁器の批評と収集の天才といわれる。芥川龍之介らと親交が篤く、「道開会」のメンバーでもある。

北村 四海(きたむら・しかい)

明治4年(1871)～昭和2年(1927) 彫刻家
長野県出身。明治43年、田端352(現1-13)番地に入居。牙彫家・島村俊明に師事した後、洋風彫聖に転じて渡仏した。太平洋画会研究所で教鞭をとる。典雅な作風の大理石彫刻作品を制作した。

葛巻 義敏(くずまき・よしとし)

明治42年(1909)～昭和60年(1985) 小説家・評論家
東京都出身。芥川龍之介の甥(姉の長男)にあたる。大正12年、芥川龍之介宅田端435(現1-20)番地に入居。堀辰雄らが発行した雑誌『驢馬』の同人として第11号から参加、幻想的な小説を発表。昭和2年、岩波版『芥川龍之介全集』の編纂に堀辰雄とともに専念。芥川没後、原稿、資料を整理し『芥川龍之介未定稿集』『芥川龍之介未定稿・デッサン集』などを編集刊行する。

国方 林三(くにかた・りんぞう)

明治16年(1883)～昭和41年(1966) 彫刻家
香川県出身。大正初期、田端513(現3-24)番地にアトリエを築き転入。太平洋画会研究所で木炭画、塑造を学ぶ。第2回文展入選。帝展・文展・日展の審査員を務める。昭和19年、戦災により埼玉県に疎開。

窪川 鶴次郎(くぼかわ・つるじろう)

明治36年(1903)～昭和49年(1974) 詩人・評論家
静岡県出身。大正13年、田端126(現3-18)番地に入居。金沢の第四高等学校時代から中野重治と親交、雑誌『驢馬』の創刊に参画。大正15年、田島いね子(佐多稲子)と結婚。日本プロレタリア芸術連盟等左翼運動に参加。戦時下においても現代文学批評の古典とされる『現代文学論』等を刊行、戦後は民主主義文学論の展開にも努める。

久保田 万太郎(くぼた・まんたろう)

明治22年(1889)～昭和38年(1963) 小説家・劇作家・俳人
東京都台東区出身。大正12年、震災後日暮里渡辺町筑波台1032番地(石井柏亭の隣家)に入居し、芥川らと親交をもつ。森鷗外らの『三田文学』に小説『朝顔』を発表し好評を得る。限られた特殊な社会の日常生活を描き、抒情的な写実主義を作风とした。歌集としても著名、俳号・春雨(さんう)。

倉田 白羊(くらた・はくよう)

明治14年(1881)～昭和13年(1938) 洋画家
埼玉県出身。大正2年、田端506(現3-24)番地に入居。明治35年、太平洋画会会員となる。雑誌『方寸』同人。日本美術院洋画部員。大正11年、「春陽会」創立に参画。山本鼎の農民美術運動援助のため長野県上田市に転居。



小杉 放庵(こすぎ・ほうあん)

明治14年(1881)～昭和39年(1964) 洋画家・日本画家
栃木県出身。明治33年、田端163(現3-4)番地(沢田家)寄宿。同40年、155(現3-16)番地(谷田川畔)に新築転居。明治35年、太平洋画会会員となる。雑誌『方寸』の同人として画文双方で活躍。明治43-44年頃、山本鼎・森田恒友らとボプラ倶楽部を創設。渡欧後、横山大観に請われて再興日本美術院洋画部を主宰。大正12年まで『未醒』と号す。晩年は俳味の強い日本画に転じる。鹿島龍蔵の援助を受け「春陽会」を創立。



小林 秀雄(こばやし・ひでお)

明治35年(1902)～昭和58年(1983) 評論家
東京都千代田区出身。昭和4年、田河水泡宅田端155(現3-16)番地に入居。同地で書き上げた「様々なる意匠」により文壇に登場。個性的な自意識を確認し、自己の生き方を基盤とすることで批評を展開、近代文学批評を確立。文化勲章受章。実妹・高見沢潤子は田河水泡夫人。

五味 保蔵(ごみ・やすよし)

明治34年(1901)～昭和57年(1982) 歌人
長野県出身。昭和9年、田端608(現5-9-3-25)番地に入居。同郷の島木赤彦の影響を受け、短歌の道を志す。大正12年、「アララギ」に入会し本格的に作歌を開始。島木没後は、土屋文明に師事。戦後、『アララギ』の編集発行人となり、世田谷の自宅で発行を行った。歌集に『清暎』、『小ささ峠』、『鳥山』などがある。

小山 栄達(こやま・えいたつ)

明治13年(1880)～昭和20年(1945) 歴史画家
東京都文京区出身。大正3年頃、田端434(現1-20)に入居。後に325(現2-7)番地に転居。洋画と日本画の双方を学び、東京勸業博覧会・日本美術院等で褒状を受ける。明治38年、戦画展覧会を開催し注目を集める。「芸術社」を創立。文展、帝展で活躍。